

But Beautiful

パット・ビューティフル

Charles McPherson Quartet ~featuring Steve Kuhn

チャールス・マクファーソン&スティーブ・キューン

1. ビー・マイ・ラブ

Be My Love 〈N. Brodsky 〉(8:17)

2. アイ・シュッド・ケア

I Should Care 〈S. Cahn, A. Stordahl, P. Weston 〉(8:35)

3. また会う日まで

We'll Be Together Again 〈F. Laine, C. Fisher 〉(10:14)

4. マイ・アイdeal

My Ideal 〈R. Whiting, N. Chase 〉(8:52)

5. 時さえ忘れて

I Didn't Know What Time It Was 〈R. Rodgers 〉(7:20)

6. アイル・ネバー・ストップ・ラビング・ユー

I'll Never Stop Loving You 〈N. Brodsky 〉(7:06)

7. ラブレター

Love Letters 〈V. Young 〉(3:12)

8. パット・ビューティフル

But Beautiful 〈J. VanHeusen 〉(9:26)

9. 風と共に去りぬ

Gone With The Wind 〈A. Wrubel 〉(7:10)

チャールス・マクファーソン Charles McPherson 〈alto sax 〉

スティーブ・キューン Steve Kuhn 〈piano 〉

デヴィッド・ウィリアムス David Williams 〈bass 〉

リロイ・ウィリアムス Leroy Williams 〈drums 〉

録音：2003年7月24、25日　アヴァター・スタジオ、ニューヨーク

© 2004 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

*

Produced by Tetsuo Hara and Todd Barkan.
Recorded at Avatar Studio in New York on July 24 and 25 , 2003.

Engineered by James Farber.

Assistant：Aya Takemura.

Technical Coordinator by Derek Kwan.

Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound：

Shuji Kitamura and Tetsuo Hara.

Cover Photo：© Irina Ionesco / G. I. P. Tokyo.

Photos by John Abbott. Designed by Taz.

「コン・アルマ」「ザ・クイントット/ライヴ!」「フロム・ジス・モーメント・オン」「ホライゾンズ」「マクファーソンズ・ムード」などがあるが、そのいずれもがビ・バップを基にしながらも、美しい音色で情熱的なフレーズをメロディックに歌い上げてゆく彼の特質がよく発揮された、聴きごたえあるものばかりだった。もっともマクファーソンは78年からはサンディエゴへ移り、ここを拠点に活動をおこなうようになる。そして90年代にはアラバスクと専属契約を結んで「ファースト・フライト・アウト」「カム・プレイ・ウィズ・ミー」「マンハッタン・ノクターン」などのアルバムをリリースしてゆく。どれも円熟味を感じさせる渋い吹奏が魅力的で、マクファーソンの音楽が成熟を迎えていることが示された、充実した内容をもつ作品ばかりだった。また2001年7月に吹き込まれた「ア・サルルート・トゥ・バード」では、ピアニストのドン・フリードマンだけを相手に、熱いパッションをたぎらせた演奏を聴かせている。21世紀を迎えてもなお、ビ・バップとパーカー（バード）にこだわりつづけるあたりにも、マクファーソンの頑なな姿勢がよく表れている。ベテランのテナー・サクソ奏者、ジミー・ヒースがこんな風に言っている。“チャールス・マクファーソンは、パーカー・スタイルの語法でプレイするナンバー・ワン・プレイヤーだと思ふ。彼のアドリブ・ラインは情熱的で、さまざまな感情がサクソスから噴き出してくる。マクファーソンのように爆発的なフィーリングを感じさせるプレイヤーは、ほとんど僕のまわりにはいないね・・・”

そんなマクファーソンをサポートするリズム・セクションの面々も、いずれもベテランの実力派プレイヤーばかり。とくにピアニストのスティーブ・キューンは、近年も「誘惑」をはじめとする素晴らしいアルバムの数々を、ヴィーナス・レコードからリリースしている。かつ

での研ぎ澄まされた感性の魅力はそのままに、彼の音楽も今日、良い意味での成熟を迎えている。その極上の美質をもったメロディックなピアノ・タッチの魅力は、もちろんここでも十二分に発揮されている。

＊　　　＊　　　＊　　　＊　　　＊

ニコラス・ブロズキーが書いた<ビー・マイ・ラブ>は、歌手で俳優でもあったマリオ・ランツァ、55年の大ヒット・ナンバー。近年はキース・ジャレットやテナーのエリック・アレキサンダーがとりあげて演奏していたが、マクファーソンはたっぷりした感じで美しいテーマを歌い、堂々たるソロを繰りひろげてゆく。もとのメロディーを随所にちりばめながら、変化に富んだバリエイションを聴かせてゆくプレイが鮮やかだ。<アイ・シュッド・ケア>は、アクセル・ストーダールとポール・ウェストンによって作られたもので、44年の映画「スリル・オブ・ア・ロマンス」の主題歌。朗々とメロディーを歌い上げてゆくマクファーソンに対して、キューンのピアノがロマンティックなタッチで応えている。<また会う日まで>は、歌手のフランキー・レインと伴奏ピアニストだったカール・フィッシャーの共作になるもの。斬新な感じのイントロのあと、やはりマクファーソンがたっぷりした感じでメロディーを吹き上げている。あくまでマイペースに、豊かなフレーズを綴ってゆくマクファーソン。その堂々たる押し出しをもったプレイが素晴らしい。キューンのピアノ・ソロを受けて、デヴィッド・ウィリアムスも強靱なトーンをもったベース・ソロを聴かせている。<マイ・アイdeal>は30年の映画「プレイボーイ・オブ・パリ」のために書かれた、名スタンダード・ナンバー。ここではマクファーソンもさることながら、中間部を彩るキューンのピアノ・ソロがじつに美しい。彼のリリカルなメロディック・センスの美しさが最高に発揮された、素晴らしいソロである。マクファーソンは、やはりもとのメロディーを大切にしながら、随所に冒險的なフレーズをまじえて吹ききっている。<時さえ忘れて>は名ソング・ライター、リチャード・ロジャースが39年のミュージカル「トゥー・メニー・ガールズ」のために書いたもの。チャーリー・パーカーが愛奏し、ストリングスをバックにした名録音をのこしているナンバーでもある。パーカー風のアクセントをもつフレーズをまじえたマクファーソンのプレイを耳にすると、いまなおパーカーの音楽を愛してやまない彼の気持ちちが、ひしひしと伝わってくる。<アイル・ネバー・ストップ・ラビング・ユー>は、ふたたびブロズキーの作品で、ドリス・デイの歌などで知られている。これもマクファーソンの成熟ぶりがよく表れている、素晴らしいバラード・プレイということができるだろう。<ラブレター>はここではアルト・サクソのソロで聴くことができる。力強くも美しく確信に満ちた素晴らしいフレーズが魅力。アルバムのタイトル曲<パット・ビューティフル>は、ジミー・ヴァン・ヒューゼンによる47年の映画「南米珍道中」の主題歌で、ピング・クロスビーが歌ってヒットし、アカデミー賞にもノミネートされた。たっぷりした余裕すら感じさせる、大きなスケールをもつマクファーソンのバラード・プレイ。その自信あふれる吹奏のなかに、今日のチャールス・マクファーソンの好調ぶりがよく示されている。<風と共に去りぬ>は同名の小説にインスパイアされて、37年にアリー・リューベルが作ったもの。映画と直接の関係はないものの、ジャズではしばしばとりあげられ、演奏されてきた。マクファーソンは ミディアム・テンポに乗せて、たっぷりした感じでメロディーを吹いてゆくが、リラックスした心地よさとともに、彼のプレイからはホットな情念のようなものが強く伝わってくる。

岡崎 正通

ベテランのアルト・サクソ奏者、チャールス・マクファーソンによる待望のリーダー・アルバムが、ヴィーナス・レコードの手によって制作され、リリースされることになった。チャールス・マクファーソンといえば、1960～70年代頃には多くのアルバムを世に送り出して、ファンの間でも大きなスポットライトが当てられたものだった。しかし近年の彼は来日ライブなどはおこなったものの、新作のレコーディングというのはそんなに多くなく、往時のマクファーソンの姿を知るファンからは、その発売が待ち望まれていた。そんなファンの気持ちに応えるようにリリースされた作品が「パット・ビューティフル」である。ここでマクファーソンは、今日に生きるアルト・サクソ・プレイヤーとして、その実力と個性を如何なく発揮してみせている。サクソのトーンそのものも、以前に比べて太く逞しいものになり、自信あふれる堂々たる吹奏を聴かせてくれる。チャールス・マクファーソンのプレイは、チャーリー・パーカー直系といえるビ・バップ・イディオムにもとづいたスタイルに大きな特徴があるけれども、ここではそういったものを基本にしながらも、より個性的なトーンとともにエモーショナルなアドリブを繰りひろげてみせる。そこには今日のマクファーソンの、音楽に賭けるピュアーな情熱が、ひしひしと感じられるのだ。細かなフレーズを複雑に綴ってゆくあたりは、かつての彼の演奏にはみられなかったもので、そこにマクファーソンの前向きな音楽への姿勢をみる思いがするのは、僕だけではないだろう。マクファーソンのプレイは自信にあふれていて、自己のスタイルを信念をもって押し出していっているのが、なんとも素晴らしい。

1939年7月、ミズーリ州のジョブリンという街に生まれたチャールス・マクファーソンは、13才になった頃にアルト・サクソを手に入れている。まだ10代だった頃からデトロイトの周辺でプレイをおこなうようになって、ピアニストのラリー・ハリスやトランベッター、ロニー・ヒリアーと知り合い、彼らを通じてビ・バップを身をもって知ることになった。ニューヨークへ出たのは59年のことで、まもなく61年にチャールス・ミンガスのジャズ・ワークショップに参加。ミンガス・サウンドのなかで、純粋なパーカー・スタイルによるプレイを繰りひろげて、異彩を放っていったものだった。マクファーソンは71年までミンガス・バンドに籍を置き、その後も折にふれてミンガスと共演を重ねている。この時代のアルト・サクソ奏者の多くが、チャーリー・パーカーの影響を受けながらも、そこから派生して各々の演奏スタイルを作りあげていったのに対して、マクファーソンの場合にはパーカーというスタンスにとどまりながら、パーカー・スタイルを徹底的に掘り下げていったところに大きな特徴がある。マクファーソンにとってビ・バップは、彼の信念のようなものでもあり、この軸がずれたことは長いキャリアの中にあっても、いちどもない。マクファーソンが61年に、のちにレギュラー・クイントットを組むことになるロニー・ヒリアーと一緒に、ラリー・ハリスのバンドに加わって吹き込んだリヴァーサイド盤のアルバムには「Newer Than New」というタイトルがつけられていた。ジョン・コルトレーンやオーネット・コールマンなどの演奏スタイルが先端をゆくものと考えられていた当時のジャズ界にあって、より新鮮なものがビ・バップの中にあるのだという、マクファーソンならではの行き方が打ち出されているこの作品は、彼らの力強いビ・バップ宣言！と呼べる一枚でもあった。また64年に吹き込まれたマクファーソンの初リーダー・アルバムが「Be Bop Revisited」と名づけられていたのも、彼のビ・バップへの執着を示すものにほかならない。このあとマクファーソンがプレスティッジ・レーベルに吹き込んだ作品には